

# 日系ブラジル人と日本人との関係

—— 滋賀県長浜市を例として ——

Relation between Japanese-brazilian and Japanese

—— As a case with Shiga Prefecture Nagahama City ——

大 東 貢 生

## 要 旨

日系ブラジル人と日本人との関係について、滋賀県長浜市の派遣会社に雇用されている日系ブラジル人が日本人とどのような関係を結んでいるのかについて量的調査を行い検討した結果、日本人にとって「顔の见えない定住化」の典型例と考えられる派遣会社雇用の日系ブラジル人は、派遣会社雇用であるが故に日本人と関係を持たず、日本人との付き合いで困っていることや差別偏見を感じずに生活している。しかし働いている場面での日本人の付き合いを契機として、自分たちの置かれた位置を確認し、日本人との社会関係を取り結びつつあると考えられる。

キーワード：日系ブラジル人、社会関係、差別、共生

## 1 問題の所在

この小論の目的は、滋賀県長浜市在住の日系ブラジル人と日本人との関係について、特に滋賀県長浜市の派遣会社に雇用されている日系ブラジル人の実態や意識から検討することにある。1990年の出入国管理及び難民法の施行以降、定住者資格を有する日系人3世が渡日した結果、日本における日系ブラジル人・日系ペルー人などの日系外国人労働者が増加しつつある<sup>1)</sup>。こうした日系外国人労働者は派遣業者を通じ主に製造業に就労するという形式で、すなわち労働市場が先行することにより、日本に出稼ぎ労働者として「一時的に」生活している。丹野清人は「労働市場が要求する機能によって引き起こされる外部不経済の問題」そして「地域社会には意図せざる結果を引き起こす」問題を「顔の见えない定住化」(丹野 2005: 57)と呼

んでいるが、滋賀県長浜市においても日系外国人は2003年のデータでは3,275人を数え長浜市人口の5.4%を占めている。また、このうち68.4%にあたる2,241人が日系ブラジル人である<sup>2)</sup>。

以下ではこうした日系ブラジル人が日本人とどのような関係を結んでいるのか、あるいはいないのかについて、長浜市にある最大の日系ブラジル人派遣業社であるA社において雇用されている日系ブラジル人とその家族への量的調査により検討を試みたいと思う。なおA社では日系ブラジル人はA社が準備した寮に居住している。また福利厚生などもA社が提供している。派遣会社が、地域行政などが担うべき制度を提供することで、日系ブラジル人の日本人との関係にどのような影響を与えているのかについても検討を加えたい。

## 2 調査の概要

2005年1月にA社の日系ブラジル人寮に対して留め置き法による量的調査を行った。なお、このデータに基づき SPSS11.0J によって分析を行った<sup>3)</sup>。

## 3 結果と考察

### 3.1 属性・滞在予定・日本語能力からみた日本人との関係

アンケート回答者の中で日本人の知り合いがいる人は175人(67.8%)である。また、知り合いがいると回答した人の中での日本人の知り合いの平均人数は13.34人である(表1・表2)。

では、日本人の知り合いの数は年齢などの属性や日本での滞在経験・予定とどのような関係があるのだろうか。以下では、まず、回答者の属性と日本での滞在経験・予定との関係を見てみたい。なお、属性については、回答者のうち228人(88.4%)がブラジル籍と答えており、日本籍が5人(1.9%)と少ないため分析から除外した。そして、滞在経験・予定については滞在経験が長いほど日本人との接触が多くなり知り合いが増えること、また当初から長いようと思えば知り合いを積極的に作ることが考えられるためここで分析を行うこととした。つまり、年齢、性別、日系何世、在留資格、渡日年、渡日時の滞在予定年数、渡日回数、長浜での居住年数、長浜での滞在予定、日本での居住予定、以上10項目との関係についてピアソンの積率相関係数により分析を行った。表3はその結果である。

日本人の知り合いの人数と属性との関係で有意な関係にあるのは、年齢(0.203)、である。また、滞在経験で有意な関係にあるのは、渡日年(-0.199)、長浜での居住予定(0.143)である<sup>4)</sup>。つまり「年齢が高い」「渡日年が古い」

表1 日本人の知り合い

	度数	パーセント	有効 パーセント	累積 パーセント
有効	175	67.8	73.5	73.5
いない	63	24.4	26.5	100.0
合計	238	92.2	100.0	
欠損値	1	.4		
無回答	19	7.4		
合計	20	7.8		
合計	258	100.0		

表2 日本人の知り合いの数

	度数	パーセント	有効 パーセント	累積 パーセント
有効 0	60	23.3	27.0	27.0
1	5	1.9	2.3	29.3
2	10	3.9	4.5	33.8
3	13	5.0	5.9	39.6
4	8	3.1	3.6	43.2
5	17	6.6	7.7	50.9
6	7	2.7	3.2	54.1
8	6	2.3	2.7	56.8
9	2	0.8	0.9	57.7
10	47	18.2	21.2	78.8
12	1	0.4	0.5	79.3
13	1	0.4	0.5	79.7
15	7	2.7	3.2	82.9
20	19	7.4	8.6	91.4
25	2	0.8	0.9	92.3
30	7	2.7	3.2	95.5
40	1	0.4	0.5	95.9
50	4	1.6	1.8	97.7
60	1	0.4	0.5	98.2
70	1	0.4	0.5	98.6
100人以上	3	1.2	1.4	100.0
合計	222	86.0	100.0	
欠損値	10	3.9		
非該当	26	10.1		
無回答	36	14.0		
合計	258	100.0		

「長浜での居住予定が長い」ほど日本人の知り合いが多いという結果になった。また「渡日時の滞在予定年数」「長浜での居住年数」は「日本人の知り合いの数」と関係がないことが示された。

「年齢が高い」人には日系1世2世が多い。そのため日本人とのコミュニケーション能力を持っていると考えられる<sup>5)</sup>。日本人とのコミュ

表 3 日本人の知り合いの人数と属性・滞在経験・滞在予定との相関

	年 齢	性 別	日系何世	在留資格	渡 日 年
Pearson の相 関 係 数	0.203**	-0.072	-0.103	-0.006	-0.199**
有 意 確 率 (両側)	0.002	0.290	0.182	0.924	0.003
N	222	216	171	222	218
	渡 日 時 の 滞 在 予 定	渡 日 回 数	長 浜 で の 居 住 年 数	長 浜 で の 居 住 予 定	日 本 で の 居 住 予 定
Pearson の相 関 係 数	-0.044	0.058	0.116	-0.143*	-0.088
有 意 確 率 (両側)	0.541	0.391	0.144	0.035	0.200
N	195	222	159	218	216

\*\* = P&lt;0.01 \* = P&lt;0.05

表 4 日本語能力との相関関係

	Pearson の相 関 係 数	人 数	年 齢	渡日年	長浜居 住 予 定	聞 く	話 す	読 む	書 く
日本人の知り 合いの人数	相 関 係 数	1	0.203**	-0.199**	-0.143*	-0.306**	-0.323**	-0.239**	-0.262**
	有 意 確 率	.	0.002	0.003	0.035	0.000	0.000	0.001	0.000
	N	222	222	218	218	208	206	198	197
年 齢	相 関 係 数	0.203**	1	-0.300**	0.079	-0.275**	-0.364**	-0.097	-0.049
	有 意 確 率	0.002	.	0.000	0.214	0.000	0.000	0.153	0.476
	N	222	258	247	249	233	228	218	216
渡日年	相 関 係 数	-0.199**	-0.300**	1	-0.009	0.405**	0.413**	0.191**	0.185**
	有 意 確 率	0.003	0.000	.	0.884	0.000	0.000	0.005	0.007
	N	218	247	247	240	225	223	213	211
長浜で の居住 予定	相 関 係 数	-0.143*	0.079	-0.009	1	-0.052	-0.043	-0.035	-0.050
	有 意 確 率	0.035	0.214	0.884	.	0.439	0.522	0.614	0.472
	N	218	249	240	249	224	220	210	208

\*\* = P&lt;0.01 \* = P&lt;0.05 なお有意確率は両側検定による。

ニケーション能力の例として日本語能力との関係をピアソンの積率相関係数によってみると(表4)、「日本人の知り合いが多い人」は「日本語能力」において聞く(−0.306)・話す(−0.323)・読む(−0.239)・書く(−0.262)とすべての能力において有意な関係が得られた。ただこの傾向では日本語能力が「あった」から日本人の知り合いが多いのか、日本人の知り合いが多いから日本語能力が「あった」のは明かではない。

「年齢」は「日本語能力：聞く」(−0.275)「日本語能力：話す」(−0.365)において有意な関係があった。従って「年齢が高い」人は日本語能力の特に「話す・聞く」に長けているため日本人の知り合いが多いと考えられる。

ところで「渡日年が古い」「長浜居住予定が長い」人にも日本人の知り合いが多い。「渡日年が古い人」を表4でみると、「年齢が高い人」に「渡日年が古い人」(−0.300)が多いが、「渡日年の古い人」には日本語能力の「話す」(0.405)「聞く」(0.413)「読む」(0.191)「書く」(0.185)との相関がある。「渡日年の古い人」は「日本語能力」に長けているため日本人の知り合いが多いと考えられる。「渡日年が古い人」で「年齢が高い人」は「読む」「書く」ことが出来ないため、相対的に低年齢層で「渡日年が

古い人」が「読む」「書く」が出来ると思われる。例えば低年齢時に親と一緒に渡日し日本の教育課程を受けた人たちが該当すると思われる。

さらに、「長浜居住予定」の長い人は日本人の知り合いが多いという結果については、表4に基づけば、年齢、国籍、渡日年、日本語能力と相関がないことが示された。日本滞在年数、日本滞在予定が日本人の知り合いの数と関連していないことを考えると、長浜という地域にある程度の期間住みつつける予定の人は日本語能力に関わらず、日本人の知り合いを作る傾向があるといえよう。

したがって、日本人の知り合いが多い人は、①高年齢層、②渡日年が古く低年齢層で日本語の読み書きが出来る人、③長浜という地域に長くいる予定の人に分けられると考えられる。

### 3.2 日本人の知り合いと差別・偏見

次に、日本人の知り合いが多いことと差別や偏見を感じるかどうかについて検討したい。日本人の知り合いがいる人は175人(67.8%)である。しかし近所の日本人とどのような付き合いをしているのかについては、表5に見られるように、日本人の知り合いがいる人の中でも128人(74.0%)が「ない」と答えている。したがって、日系ブラジル人のいう日本人の知り

表5 日本人の知り合いと近所の人との付き合いの程度

		近所の日本人との付き合いの程度				合計
		つきあいはない	あいさつか簡単な会話のみ	浅いつきあい	深いつきあい	
日本人の知り合い	いる	128	30	12	3	173
	日本人の知り合いの%	74.0%	17.3%	6.9%	1.7%	100.0%
	いない	56	5	1	0	62
	日本人の知り合いの%	90.3%	8.1%	1.6%	0%	100.0%
合 計	度 数	184	35	13	3	235
	日本人の知り合いの%	78.3%	14.9%	5.5%	1.3%	100.0%

合いのほとんどは地域のコミュニティに所属している人ではないと考えられる。では、近所の日本人と付き合いがないのはなぜなのであろうか。また、日系ブラジル人の日本人の知り合いというのはどういう人たちなのであろうか。

以上のことを検討するために、日本人の知り合いの数と近所の日本人との付き合いの程度、日本人の付き合いで困ることの項目をピアソンの積率相関係数により分析を行った。

表6によれば、日本人の知り合いの人数は近所の日本人と付き合いがあること(0.246)と

関係している。ただし先に見たように全体としては近所の日本人と付き合いがない人が多い。さらに、日本人の知り合いの人数は「言葉が通じなくて困る」と関係している(−0.212)。これは言葉が通じなくて困っている人ほど日本人の知り合いが少ないことを示している。また「日本人と付き合う時間がない」は「日本人の知り合いの人数」と無関係であることが分る。このことから日系ブラジル人は忙しくて時間がないから日本の知り合いがいないのではないことが推測される。A社では日系ブラジル人の生

表6 日本人との付き合いで困ることとの相関関係

		近所の日本人との 付き合いの程度	年 齢	渡 日 年	長浜での 居住予定	文化や習慣を理解 してくれない	言 葉 が 通じない	日本の習慣が分らない	日本人が 付き合いを避ける	日本人と 付き合う時間がない
日本人の 知り合いの人数	Pearsonの相関係数	0.246**	0.203**	−0.199**	−0.143*	0.013	−0.212**	−0.080	−0.098	0.104
	有意確率(両側)	0.000	0.002	0.003	0.035	0.857	0.003	0.261	0.170	0.147
	N	219	222	218	218	197	197	197	197	197
近所の日本人との 付き合いの程度	Pearsonの相関係数	1	0.091	−0.148*	−0.076	−0.060	−0.119	−0.059	−0.090	0.047
	有意確率(両側)	.	0.151	0.022	0.239	0.381	0.080	0.383	0.183	0.494
	N	250	250	241	241	218	218	218	218	218
年 齢	Pearsonの相関係数	0.091	1	−0.300**	0.079	0.018	−0.333**	−0.065	0.024	0.053
	有意確率(両側)	0.151	.	0.000	0.214	0.788	0.000	0.335	0.723	0.431
	N	250	258	247	249	221	221	221	221	221
渡 日 年	Pearsonの相関係数	−0.148*	−0.300**	1	−0.009	−0.153*	0.308**	0.029	−0.086	−0.039
	有意確率(両側)	0.022	0.000	.	0.884	0.026	0.000	0.668	0.209	0.574
	N	241	247	247	240	214	214	214	214	214
長浜での 居住予定	Pearsonの相関係数	0.076	0.079	−0.009	1	0.110	−0.033	−0.133	0.000	−0.053
	有意確率(両側)	0.239	0.214	0.884	.	0.105	0.633	0.051	0.996	0.437
	N	241	249	240	249	216	216	216	216	216

\*\* =  $P < 0.01$  \* =  $P < 0.05$

活に対し、寮の整備、A社独自の社会保障の導入など、本来であれば市役所などに出向き行わなければならないことを雇用している日系ブラジル人に対して行っている。このことが「必要に迫られていないから日本人の知り合いを作らなくてもよい」という意識を持たせているのかもしれない。これは日系ブラジル人からみた「顔の見えない定住化」の一側面であると考えられる。

また前章において日本人の知り合いが多い人としてまとめた①高年齢層、②渡日年が古い低年齢層で日本語の読み書きが出来る人、③長浜という地域に長くいる予定の人が付き合いで困っていることで特徴があるかをみたところ、年齢で「言葉が通じなくて困る」と有意な関係があった（ $-0.333$ ）。これは若い人ほど言葉が通じないことを困っていることにあげていることを示している。このことから見ても、高齢者は日本語能力を有することが推測される。

「渡日年」では、「近所の日本人との付き合いの程度」（ $-0.148$ ）、「文化や習慣を理解してくれない」（ $-0.153$ ）、「言葉が通じない」（ $0.308$ ）との項目において有意な関係が見られた。これは渡日した年が古いほど、近所の人と付き合いがある、文化や習慣を理解してくれる、言葉で困らない、ことを示している。「渡日した年が古い人」は先に見たように、日本語能力、特に話す聞く能力を持つものが多い。したがって日本人との関係も比較的良好のようである。

長浜での居住予定と日本人との付き合いで困っていることとの関係では有意な相関は見られなかった。これは長浜での居住予定の期間が日本人との親密な付き合いによって決まっているのではないことを示している<sup>6)</sup>。長浜の居住予定が長い人は、おそらくA社の寮にずっと住み続けることを想定しており、そのため日本人との関係を考慮しなくてもよいと考えているのかもしれない。

次に、日本人の知り合いの数、近所の日本人

との付き合いの程度、年齢、渡日年、長浜での居住予定と差別・偏見項目をピアソンの積率相関係数により分析した。

表7によれば、日本人の知り合いの数は「街を歩いているとき」（ $0.153$ ）、「近所の人と話しているとき」（ $0.218$ ）「市役所などの窓口で」（ $0.242$ ）「子どもの学校で」（ $0.135$ ）と関係があることが分った。これは日本人との付き合いの人数が多いほど「街・近所・役所・学校」などの様々な生活の場面で差別や偏見を感じるが多くなることを示している。これは日本人の付き合いが多い人は日本人との接点が多いために差別や偏見を感じるが多く、日本人の知り合いが少ない人（あるいはない人）は接点がないために差別や偏見を感じるが少ないと考えられる。あるいは日本を理解することが増えるにつれて偏見や差別意識が生じてくるからかもしれない。

逆に単純集計で一番多かった「働いているとき」（ $90人：36.3\%$ ）と回答した人は日本人の知り合いの人数とほとんど関係がないことが示された。したがってA社雇用の日系ブラジル人にとって唯一といえるかもしれない職場という場面での日本人との知り合いは、働いている場面での差別偏見のありなしに関わらず、その他の場面での差別・偏見意識を生み出している可能性がある。A社雇用の日系ブラジル人は日本人との社会関係量が少ないために差別偏見を感じないが、働いている場面での日本人との社会関係量の増加が、差別偏見を感じさせる契機になっているかもしれない。

また、年齢、渡日年、長浜での居住予定との関係では、年齢では「子どもの学校で」（ $-0.155$ ）と関係がある。渡日年では「市役所などの窓口で」（ $-0.180$ ）「子どもの学校で」（ $-0.147$ ）と関係がある。これらの項目はいずれも高年齢者や渡日年の古い人は差別や偏見を感じるが多くなることを示している。渡日年では「差別偏見を感じることはない」（ $0.144$ ）に

表7 差別・偏見項目との相関関係

		街を歩いているとき	近所の人と話しているとき	働いているとき	市役所などの窓口で	病院にたき行ったとき	子どもの学校で	ない
日本人の知り合いの人数	Pearsonの相関係数	0.153*	0.218**	0.036	0.242**	0.105	0.135*	0.005
	有意確率(両側)	0.024	0.001	0.596	0.000	0.121	0.047	0.936
	N	219	219	219	219	219	219	219
近所の日本人との付き合いの程度	Pearsonの相関係数	0.042	0.099	0.058	0.013	-0.067	0.087	-0.011
	有意確率(両側)	0.514	0.123	0.366	0.836	0.297	0.177	0.865
	N	245	245	245	245	245	245	245
年 齢	Pearsonの相関係数	-0.032	0.026	0.112	0.044	-0.067	-0.155*	-0.044
	有意確率(両側)	0.617	0.684	0.077	0.490	0.291	0.014	0.486
	N	249	249	249	249	249	249	249
渡 日 年	Pearsonの相関係数	-0.025	-0.068	-0.126	-0.180**	-0.079	-0.147*	0.144*
	有意確率(両側)	0.697	0.295	0.051	0.005	0.225	0.023	0.026
	N	240	240	240	240	240	240	240
長浜での居住予定	Pearsonの相関係数	-0.019	-0.100	-0.085	0.022	-0.058	-0.098	0.088
	有意確率(両側)	0.772	0.121	0.186	0.730	0.369	0.128	0.174
	N	241	241	241	241	241	241	241

\*\* =  $P < 0.01$  \* =  $P < 0.05$ 

関係があること、高年齢者や渡日年の古い人は日本語能力を有するものが多かったこと、表6にあるように高年齢者や渡日年の古い人は相対的に言葉の問題で困っていないことを考えると行政が何らかの形で日系ブラジル人の言葉の問題をサポートしなければならないと思われる。

さらに、長浜での居住予定は差別・偏見項目と相関がなかった。表6でも示したように困っていることでも相関がなかったが、差別や偏見、困っていることがあることは長浜居住予定に影響を与えていないことが示されているであろう。

まとめると、A社雇用の日系ブラジル人の日本人の知り合いは近所の人ではなく働いている場面で会う日本人である。日本人の知り合いの人数が多い人は職場での日本人の知り合いが多い人であると考えられるが、日本人の知り合いが増えることによって、働いている場面でなく生活の様々な場面で差別や偏見を感じることも多くなってくる。これは社会関係量の増大に伴って問題が生じることを示している。また、増大による問題の発生は日本を理解することによる相対的剥奪の結果であるかもしれない。こ

の問題を解決する要因のひとつに「言葉の問題」がある。言葉の問題が解決できれば問題状況は、再び感じないようになるかもしれない。

#### 4 要約と課題

この小論の目的は、滋賀県長浜市在住の日系ブラジル人と日本人との関係について、特に長浜市A社に雇用されている日系ブラジル人が日本人とどのような関係を結んでいるのか、あるいはいないのかについて、検討することである。

2005年1月にA社に雇用されている日系ブラジル人に対して行った調査を分析した結果、日本人の知り合いがいた人は175人(67.8%)である。日本人の知り合いの人数が多い人の特徴を属性と日本での滞在経験・予定から検討すると①高年齢層、②渡日年が古く低年齢層で日本語の読み書きが出来る人、③長浜という地域に長くいる予定の人に分けられると考えられた(以上、3.1)。

次に日本人の知り合いが多い人は「日本人との付き合いで困っていること」や「差別や偏見」に対してどのように考えているのかについて検討した。その結果、日本人の知り合いとは近所に住んでいる人ではなく働いている場面にいる日本人であることが多いことが分った。また日本人と付き合う時間がないから日本人の知り合いがいないのではないことが明らかにされた。そして、A社に雇用されている日系ブラジル人が日本人の知り合いを作るときには日本語能力に長けているかどうか大きな要因となっている。この言葉の問題はA社という会社に雇用されることで日本人との社会関係を持たなくても生活できる日系ブラジル人が、日本人との関係の中で一番大きな障害と考えていることである。言葉が出来ることによって日本人の知り合いが増え、増えることによって生活の様々な場面で差別偏見を感じるが増加していくことが考えられる。日系ブラジル人から見ればこの問題

を解決するのにもまた言葉の問題であると考えられる(以上、3.2)。

以上から、日本人にとって「顔の見えない定住化」の典型例と考えられるA社雇用の日系ブラジル人は、A社雇用であるが故に日本人と関係を持たず、日本人との付き合いで困っていることや差別偏見を感じずに生活している。しかし働いている場面での日本人の付き合いを契機として、自分たちの置かれた位置を確認し、日本人との社会関係を取り結びつつあるのではなかろうか。

なお、今回の報告は長浜市でのA社に雇用されている日系ブラジル人の調査データのみの分析にとどまっており、この調査の前後に行った滋賀県在住の日系ブラジル人に対するインタビュー調査などとの比較をまったく行っていない。今後はこの小論の妥当性についてインタビュー調査を積み重ねて検討するとともに、他の地域との比較を試みることによって、長浜という地域での日系ブラジル人の意識について検討を行いたい。さらに日系ブラジル人の研究において、また日本人と外国人の共生の問題においていくつかの理論的枠組みが展開されているが、この小論ではまったくこうした知見を検討できなかった。今後は、研究チームで行われた長浜市民調査などの日本人調査などをも精査し、日本人側の共生の問題を検討しつつ、理論的展開を行っていきたいと考えている。

#### 注

- 1) 日系外国人の増加については西村雄郎(2006a, 2006b)、近藤敏夫(2006)を参照のこと。
- 2) 長浜市の外国籍市民人口については西村雄郎(2006c)を参照のこと。
- 3) この調査の詳細な概要および属性などの単純集計表については長光太志・近藤敏夫・大東貢生・富川拓(2006)を参照のこと。この調査は長浜市に居住する日系ブラジル人を特定することが困難であったため、標本調査にはなっていない。したがって統計ソフトによる分析は原則的には使用できないが、本論では仮説を作出するために使用している。



- 4) 検定に用いたデータでは「日本人の知り合いの数」は実数をそのまま用いている。すなわちデータが大きくなればなるほど知り合いの数は多い。以下「年齢」はデータが大きくなればなるほど高年齢,「国籍」はデータが大きいの「日系3世・4世」と答えた人,「渡日年」はデータが大きくなればなるほど最近渡日している,「長浜での居住予定」はデータが大きくなればなるほど長い居住予定を示している。
- 5)「日本語能力」の4つの質問は,データが大きくなればなるほど「日本語が出来ない」ことを示している。「年齢」はデータが大きくなればなるほど高齢であり,「国籍」はデータが大きくなればなるほど日系3世・4世のため,「年齢」「国籍」と「日本語能力」は逆相関の形式を取っている(長光・近藤・大東・富川:2006)。
- 6) 長浜居住予定が長い人の傾向として,配偶者(0.243)や子ども(0.305)と同居している人との関係がある。逆に仕事の満足や長浜という地域の満足度や長浜市に対する要求とは関係がないことがあげられる。家族がいることは長期居住を考える原因になっていると考えられる(長光・近藤・大東・富川:2006)。
- 7) 補足として日本人の知り合いが多い人の特徴を質問紙のその他の質問項目に基づいて概観したい。日本人の知り合いが多い人と「休日を誰と過ごすか」「困ったときに頼りにする人」「生活に必要な情報」「仕事に求めること」「長浜市への要望」とでピアソンの積率相関係数をみたところ,「休日を誰と過ごすか」において,「ブラジル人の友人」(0.184  $P<0.01$ ),「日本の友人」(0.288  $P<0.01$ )であった。つまり「日本人の知り合いが多い」人はブラジル人の友人とも積極的に付き合っている人が多いことになる。したがって元々積極的に人間関係を豊かにしようとしている人である可能性がある。さらに言えば,日本人の知り合いが多い人は「仕事に求めること」の項目で「人間関係がうまくいくこと」(0.146  $P<0.01$ )と相関関係がある。したがって日本人の知り合いが多い人は,他の人と積極的に交流し人間関係を豊かにしようとしている人なのかもしれない。こうした人々が,日本人の中で外国籍住民との積極的な交流を求める人々,例えば日本語ボランティアを行う人々と出会う

ことによって,社会関係量の蓄積がなされると考えられる。

## 文 献

- 近藤敏夫, 2006,「日系ブラジル人の出稼ぎ長期化と定住化傾向」西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』。
- 長光太志・近藤敏夫・大東貢生・富川拓「長浜における日系ブラジル人の生活と民族関係意識」西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』。
- 西村雄郎, 2006a,「外国籍市民の流入とエスニック・コミュニティ」西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』。
- 西村雄郎, 2006b,「滋賀県の地域構造変容と外国籍労働者」西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』。
- 西村雄郎, 2006c,「長浜市の地域構造変容と外国籍労働者」西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』。
- 丹野 清, 2005,「企業社会と外国人労働市場の共進化」,梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化 日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会 52-75。

## 付記

この小論は,西村雄郎編『平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 エスニック・コミュニティの比較都市社会学』掲載の報告を加筆修正したものである。また平成18年度佛教大学特別研究助成の成果の一部である。

(おおつかたかお 佛教大学社会学部専任講師)